

2. 講演「米国における高大接続の現状と課題」

(1) 「米国の大学の立場から」

元マサチューセッツ大学副総長 アンドリュー・エフラット

日本とアメリカには、類似した点がたくさんございます。高卒の多くの学生が、今、高等教育機関に進み、勉学を続けていますから、高等教育の成功とその効果というのは、個々の学生、家族、コミュニティの将来のために、非常に大きな影響を持っております。反対に、そこで失敗すれば、個人だけでなく、社会にも大きな損失になります。どのようにこの接続・移行を上手に行うかということは、アメリカでも日本でも、そして世界中で、大きな課題となっております。ということで、日本の文部科学省、名古屋大学大学院教育発達科学研究科大谷先生、また、このセンターに関わる皆さまの、非常に革新的な働きとリーダーシップに敬意を表したいと思います。

今日の私のお話の目的は、この問題に関するアメリカにおける知見と私自身の見解を皆さまと共有することです。アメリカの経験が日本にそのまま当てはまるとは思いませんが、お互いに同じような課題の解決について学び合うことができればと思います。と申しますのも、同様の問題を日米では共有しておりますし、これらへのアプローチをお互いに学び合うことができれば、大きな貢献となると思うからです。

今日の講演の概要ですが、1つ目が「大きな構図」、2つ目が「ちょっと恐ろしい話」、3つ目が「いくつかの小さなお話」、4つ目が「高大接続のキープポイントにおける傾向と発展」、5つ目が「教育方針策定のための研究への示唆」、最後に、皆さんからの質問とコメントを、ノーラ・ステイブレン先生のお話の後、まとめて受けられればと思います。

アメリカの高等教育機関

では、大きな構図からお話ししたいと思います。(図1参照) まずアメリカの高等教育の機関についてですが、多くのものがあります。全部合わせますと、約4,700校余りとなります。2つ目の重要な性質は、非常に多様な機関があるということです。カーネギー・クラシフィケーションという、高等教育機関を記述するときによく使われるものを使って申しますと、4年制大学は、大きく、博士学位授与・研究機関、学士+修士の授与機関、学士授与の機関に分けられます。1つ目の博士学位授与・研究機関が約300。2つ目の学士+修士の授与機関が約700。こういったところには、あまり博士学位授与のプログラムはありません。そして、主に学士(BA、BSc)を授与するところは、修士・博士の課程が少しはあるかもしれませんが、メインではありません。それが約800校となっております。これらが、いわゆる高等教育のメインストリームといわれる4年制の大学です。

<図1>

1.全体像
a.量: 米国には約 4,700 の高等教育機関
b.多様性
i. 4年制大学
1. 博士学位授与・研究機関 = 約 300
2. 主に学士+修士の授与機関 = 約 700
3. 主に学士授与の機関 = 約 800
ii. 特別の目的の機関 (宗教等) = 約 850
iii. 2年間以下の機関 (コミュニティカレッジ等) = 約 2,000
3

その他に、例えば宗教、芸術、あるいはロースクール、その他の特殊目的を持った高等教育機関があります。また、2年以下の機関ということで、コミュニティカレッジ、短大等があります。これらは約2,000校となっております。また、移行・接続ポイントとなって、2年制から4年制の大学あるいは教育機関に移るといことが、アメリカではよくあります。

<図2>

1.全体像 (つづき)
c.競争: 学生、教員、資金獲得への熾烈な
d. 入学者数: 1,770万人の学部生; 290万人の大学院生; 同世代の%の人数
e. アクレディテーション(教育課程認定): 地域別あるいは専門職団体による認定
g. カリキュラム: 120-128 単位: 一般教育 1/3、専門 1/3、選択科目 1/3
h. 学問の自由: 思想と言論の自由
i. 教育方法: Bloomのタキソノミーと高次思考; 個人の選択と責任の増大; 学習者の役割の一層の事前対策化
4

cについてですが、このような高等教育機関の間では、よい学生、よい教員、多くの資金を得るための、非常に熾烈な、厳しい競争があります (図2参照)。われわれのシステムは、非常に大規模であり、また、厳しい競争の中にあると言えると思います。

次にdですが、現在、さまざまな学校の学部レベルで1,770万人、大学院レベルで290万人。これは、18歳から24歳の人口の約3分の2に当たりますが、この人たちが高等教育機関に在籍しております。その過半数が、今は女性となっております。学生のグループも非常に多様性が増しております。1976年には、黒人、ヒスパニック、アジア系は16%でしたが、2012年には2倍以上になり、これらのいわゆる人種的マイノリティが37%を占めております。

eのアクレディテーション (教育課程認定) ですが、地域あるいは専門職機関が内容を審査し、認可いたします。その審査の内容によっては、変更や追加的な報告が求められることもあります。ですから、これは非常に厳しい審査が行われております。

次に、gの大学のカリキュラムですが、大抵セメスター制をとり、120から128の単位がBA(Bachelor of Arts)ならびにBSc(Bachelor of Science)の取得に必要とされます。内容は、3分の1が一般教養、3分の1が専門、3分の1が選択科目となっております。

一番重要なのは学問の自由、そして思想と言論の自由だと考えられています。これらは、ありがたいことに、アメリカでは守られていると言えます。

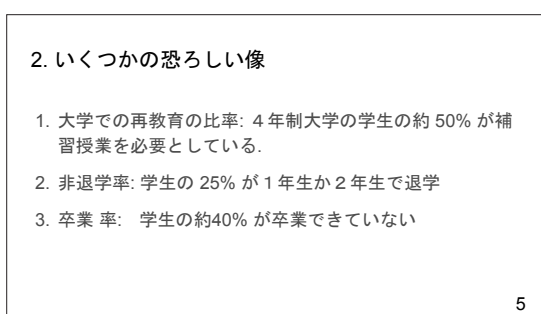
次に、ペダゴジー (教育方法) ですが、いわゆる「Bloom's taxonomy」といわれる、教育目

標の分類が行われております。そして、高校までの、外部の要求と期待によりきっちりと決められた学生の役割から、高等教育に入きますと、より個人の選択と責任の度合いが大きくなってきます。そして、このBloomのtaxonomyでも、より高等教育では高位な批判的・創造的な思考や問題解決が求められるようになります。それに対して、中等教育までは、低位の丸暗記や情報記憶が主となります。

その接続・移行に対して一番課題となるところについて、触れたいと思います。成功するためには、今までの受動的な学生の役割を抜け出て、それを脱して、新しい、より積極的な学生・学習者の役割を学ばなければなりません。そのためには、新しい文化を受け入れられるような支援が必要となってきます。

アメリカの高等教育の現状と課題

<図3>



ここで、先ほど言ったちょっと怖いお話、いくつかの恐ろしい像に入ります。(図3参照)ここでは、3つ、統計を挙げておきます。最初に、補講が必要ということです。4年制の大学に入った学生の約半数が、いわゆる補習授業を必要とするレベルです。それから、非退学率とありますが、定着率ですね。4年制の大学で、1年から2年の間に約25%が退学してしまいます。それから、3つ目の卒業率ですが、入学したうちの40%が卒業できない、つまり学業を修了できていないという現実があります。

これは6年間の統計によるものですが、これらの統計だけでは、多くの学生のドロップアウトしたことの原因までは分かりません。何かストレスがあるのか、それとも教育が期待に合わなかったのか、学生の役割の違いについていけなかったのか、いろいろな理由があると思います。ここから生まれてくる疑問は、どうやって移行・接続のプロセスを上手にできるように支援できるかという課題です。

それらについては、いろいろな課題があります。まず、中等教育から高等教育にどのような準備をしたらよいのか。それから、カリキュラムの整合性ですね。中等から高等教育のカリキュラムへの接続性、連続性。それから、入試選抜の基準が適切であるか。進路指導やカウンセリングがきちんと整っているか。高等教育機関のさまざまな制度あるいは内容が、学生のニーズにどれだけ合致しているか。学生がどれくらい満足できているか。あるいは、卒業後の生活や職業のニーズにどれくらい合っているか。これらの移行を支援するさまざまな戦略があるかどうか。測定できるもの、目に見えるものだけの評価に、あまりにも過大な焦点が当てられていないかど

うかという自らへの設問。これらは非常に重要であると思います。このような、認知できるものだけ、あるいは見えるものだけを測るという傾向に押されていないかということを問い直さなければなりません。

個人と教育機関の接続

次に、いくつかの小さな像、そのストーリーに移りたいと思います。私の大好きな言葉は、「物理の全ての法則は1滴の水の中に見いだすことができる」ということです。そこで私は、ここで、5つのストーリーについてお話したいと思います。非常に個人的な経験で、息子のジョナサンに関するものですが、個人と教育機関の接続・移りの根源的な問題を象徴的に表していると思うので、ここでお話いたします。

私にはジョナサンという息子がいるのですが、妻と私とジョナサンは、息子が高校に入学するときに、カナダから移ってまいりました。そして、高2のときに、ジョナサンはソーシャルネットワークにより溶け込み、学業以外の自分のいろいろな面も知ってもらいたいということで、陸上チームの中距離ランナーとして学校の陸上部に入ることを決心しました。ランナーに向いた肉体でもありませんで、それまでいろいろなチームのスポーツに属したこともありませんでしたが、非常に努力をし、勤勉にトレーニングに励んだ結果、学校の陸上代表チームのメンバーに選ばれました。そして、卒業するときに、スタンフォードに出願し、結局、入学を認められたわけです。

もちろん、ジョナサンは非常に成績がよく、GPAもSATのスコアもよかったです。スタンフォードを志願する学生は、ほとんどみんなその点は高いので、決め手になったのは、2つの推薦状だといわれました。1つは、ジョナサンが高校の夏休みに取った大学の夏期講習のスーパーバイザーがその勤勉さを褒めた推薦状、もう1つは、陸上のコーチからの推薦状で、チームのメンバーの模範であり、中心であったということです。

2つ目は、ウェルカム・フォー・スタンフォードユニバーシティです。さて、ジョナサンはスタンフォードにやってきました。友人は1人もいなかったのですが、スタンフォード大学に引越越しをしたその日、車で行ったのですが、私たちは、「荷物を入れるから車のところで待っていて」とジョナサンに言われました。そして、ジョナサンは、箱を持って寮に近づいていきました。そうすると、「ジョナサンが来た。マサチューセッツのジョナサンが僕たちの仲間になった。ジョナサン、よろしく」という歌声が聞こえてきたのです。

私たちは、何が起こったのかと思いました。スタンフォード大学では、新入生が入るとき、上級生がこうやって到着を祝ってくれるのです。そして、大学は、上級生に対して、新入生の名前や写真をあらかじめ知らせておくのです。そうすると、1日目であっても、名前も顔も覚えてもらっているという状況がつけられているわけです。

次のストーリーですが、ちょっとほろ苦い瞬間が私たちに訪れました。ジョナサンは、新しい友人をつくって、新しい冒険の日々に出ていきました。しかし、私と妻は、誇りと寂しさが交ざり合った、複雑な気持ちを抱えていました。一人息子が出ていってしまった、そして、一人息子がもう私たちから離れてしまっていると感じたのです。

大学はこのことを知っていたのでしょうか。親が分離不安を抱えてしまうということ、大学は

よく知っていました。ですので、両親に対してさまざまなイベントをしてくれました。私たちが忙しくすることで、寂しく思わないようにしてくれたのです。子どもたちがどういう公式行事に参加しているかについても、知らせてくれていました。ですので、子どもが離れていってしまうというこの時期を乗り越える助けを、大学がしてくれたのです。

大学2年生になると、多くの大学では特別なプログラムをやっています。これまでですと、2年生までは一般教育コースを義務付けられていて、導入概論コースをたくさん取らなければいけなかったというのが、アメリカの大学では普通でした。こうした概論コースを取って、教養教育に備えてくださいということだったのですが、アメリカでは、スタンフォード大学をはじめとするいくつかの大学が、2年生を対象として、専門度の高いコースを提供するようになりました。大変素晴らしい先生が教えるというコースでした。その分野に情熱を持つ先生が教えてくれるという、この2年生における専門度の高いコースを、ジョナサンも受けました。

ジョナサンはコンピュータサイエンスに興味を持っていましたので、ヒューマン・コンピュータ・インタラクションという特別コースを受けることができました。これを教えていたのは、当時のスタンフォードの学長であったジョン・ヘネシーその人でした。この分野を、当時、代表していた人物です。そして、学生も、教える側も、この2つの世界を共有することができたのです。まず、特別コースは、専門コースとして教えられていました。そして、その専門コースの分野で基本的な知識を受けるべく、ジェネラルな教育も授けられておりました。ですから、具体的事象を探索しながら、一般原理を学ぶということがやられていたわけです。

最後に、ジョナサンが受けた面接についてお話をしたいと思います。10年前、ジョナサンは学士号を獲得し、修士号も獲得して、いよいよ就職戦線に出陣することになりました。ジョナサンは、数ある会社の中でも、新しいスタートアップの会社に目を付けました。非常に仕事の環境がいいということで、グーグルという会社に目を付けました。彼は、グーグルから9回の面接を受けました。問題解決の質問も受けており、それらはうまく答えたようです。面接は成功でした。

しかし、あと1つ面接が残っていました。当時の上級副社長の1人であったマリッサ・メイヤーの面接を受けることになりました。彼女は、今、ヤフーのトップになっています。この面接は、グーグルのオフィスで行われたのではなく、スタンフォード大学のカフェテリアというパブリックスペースで行われました。このインタビューを受けているときに、多くの友人がやってきて、ジョナサンに話し掛けようとしてきました。ジョナサンは、こうした友人をうまくあしらって、面接にもうまく答えていたようでした。このメイヤーさんとの面接もうまくいったようでした。

私が思うに、おそらく、これは仕組まれたテストだったのでしょうか。ジョナサンが実社会で難しい状況に立ち回ることができるかどうかを試されたのでしょうか。いずれにせよ、雇ってもらえました。そして、今や、彼の面接官であったメイヤーさんの補佐になっています。現在、彼はプロジェクト管理をしたり、コミュニケーションを図ったり、つまり、知的問題を解決するだけではなくて、チームワークをつくったり、チームの中で協力関係をつくったりということも、彼の今の仕事の1つになっています。現代の職場では、こうしたチームづくりが非常に重要なわけですから。

高大接続における合否判定と評価規準

次に、4つのトピックについてお話ししたいと思います。高大接続について何が重要かということをお話の中で、いくつかストーリーを展開したいと思います。最初に、この移行・接続期にどのような形で合否の判断をするか、評価をするかということです。これまでのように認知中心ではなくて、全人格的で、公正で、体系的な評価でなければいけないという考え方があります。

ジョナサンがどのように出願し、合格したかは申し上げましたが、このことから、アメリカでも高等教育において最も議論を呼んでいる問題が浮かび上がってまいります。おそらく、教育全体を見渡しても、これほど議論を呼んでいる問題はないと思うのですが、つまり何をもちて評価をするのか、どんなプロセスで高等教育への合否判定をするのか、そしてまた、どんなやり方で幼稚園から高校にかけての達成を評価するのかということです。こうしたことを評価していくことは、詰まるところ、大学が提供するプログラムを評価することにもなるわけです。個々の学生だけではなくて、プログラム全体を評価することにもなります。

この評価の問題は、今日、アメリカを分断している多くの問題のうちの1つです。アメリカは、振り子のように2つの思想の間を行ったりきたりしているようです。おそらく、1960年代後半、ソ連のスプートニクの打ち上げからそれは始まったのでしょう。私たちは当時、アメリカの教育は、外国に対してもっと競争力のあるものでなければいけないと思い知らされたのです。

当時のライバルはソ連で、その後、日本がライバルとして出てまいりました。日本は、アメリカの教育システムに大きな影響を与えたと言えるでしょう。ですので、当時、アメリカは、より標準化された試験へと移行しました。そのほうが、アカウンタビリティがあると考えたのです。そして、学びの結果がテストされることを志向するあまり、共通の基準と試験にと動いたのが、アメリカでした。50州、全米で共通する試験をつくらうとしました。

50州は、それまで独自の基準試験を持っていました。しかし、50州独自であるということで、州間の比較はできませんでした。そのことが問題だったかどうかは別として、50の州が独自のシステムを持っていたわけです。アメリカは連邦制の国です。ということは、それぞれの州、それぞれの学区、それぞれの大学やカレッジが、自治を持つようとしているわけです。つまり、多くのアメリカ人にとって、それぞれの小さな学区あるいは州の中で、きちんとマネージできるということが非常に重要なのです。

しかしながら、2010年にかけて、50の州のうちの40までが、Common Coreといわれる共通基準を受け入れるようになりました。Common Coreといわれる基準ができ、共通の試験が出来上がりました。これをPARCCと呼んでいます。Partnership for Assessment of Readiness for College & Career、PARCCという共通試験が使われるようになりました。このCommon Coreを使うことによって、いわゆる調節不全を解消しようとしたわけです。つまり、高校と大学の間には断絶があるのであれば、それを解決しようとしたわけです。そして、学年ごとの全米の基準をつくりました。それが、今後の、卒業後のキャリアや大学のキャリアの成功につながると考えたのです。

具体的な例を出しますと、高2、高3に対するテストの設問として、「複雑な思想、概念、情報を正確に明確に説明する文章を作りなさい、その際、内容を効果的・選択的に構成し、分析しなさい」と。このような形で作文の設問がなされていたのです。先ほど同じ通訳の方と話をして

いたときに、「こんな設問は全く分からないですよ」と通訳の方は言っていました、そのとおりなのです。明確な答えを要求する設問が、それほど明確ではなかったわけです。

このように、標準、基準ができていった中で、このCommon Coreと呼ばれる標準は、これまで以上に要求の高い、厳格なものだと考えられていました。問題解決だけでなく、創造的な思考を促すだけではなくて、キャリア準備のための学びの基準として、大学にうまく接続させるということを目指していたわけです。つまり、先ほど申し上げた調節不全のための答えであると。幼稚園から高校までのカリキュラムによって、きちんと大学への基礎づくりができるようにということを考えられていたわけです。

標準・共通テストからの脱却

しかしながら、今や、振り子は元の位置に戻ろうとしています。つまり、Common Coreと呼ばれる標準や共通テストから離れる傾向があるわけです。もちろんこの共通標準というのは、言語や数学の分野では、多くの州がまだ依存している部分は多いのですが、この共通テストを使うかどうかという点では、使わないという方向への動きが多く見られています。これまで、この共通テストの急先鋒に立っていた州のうちのいくつかが、このテストから離れる動きを見せています。マサチューセッツ州もその1つです。

ですから、今、何が起きているかということを考えますと、このテストを何年間か使ってみた結果、状況はあまり芳しくない、州はこのことをよくないと考え、議論を再燃させているということではないでしょうか。現在、この共通テストへの参加を凍結しているという州が多いです。こうした高大接続の成功に向けて、先生を準備させるという点でも、今、こうした大きな変化が起こっているということです。

実際のところ、超党派的な反対意見が、この一発で全てが決まってしまう標準テストに対して巻き起こっています。オバマ政権は、このことを受けて、われわれはどうも行きすぎたようだという発言をしています。そして、このテストについて少し考えてみて、生徒に対して負担をかけない、目的のはっきりしたテストにするべきだ。このような試験偏重を抑えて、1回限りで合否が決まってしまうテストは離れて、もう少し違うやり方をしようと考えているのが、現在のオバマ政権であるようです。

これまで、試験偏重のあまり、この何年間の間に112の主要なテストを受けなければいけなかったという生徒たちの負担を減らしてやろうという試みが行われています。その合格判断については、5つの要素が評価されることが多いです。

これまでは、SATあるいはACTが非常に人気のある評価の基準となっています。それから、APというスコアもあります。このSAT、ACTは、多肢選択式のテストで、英語、数学、論証スキルを対象としたテストとなっています。2つ目の要素としてGPA (grade point average)、3つ目として推薦状、4つ目が願書。この願書の中には、課外活動のこれまでの参加記録も出さなければいけません。そして、小論文を書かせる。これら5つが評価の対象となっています。

SAT、ACTの問題と公正な評価に向けて

しかし、SAT、ACT、APのスコアが非常に偏重されていました。これらは、客観的で標準的

な評価として、これまで捉えられていたわけです。ここで強調して申し上げたいのは、これまで長期にわたって批判があったということです。先生も両親も、そしてその他の人たちが、こうした客観試験だけでいいのかと言っていたわけです。あまりにもこうした共通テストに頼りすぎてしまうということに対する批判がありました。こうしたテストだけでは、例えば高次元の思考能力は測れないのではないか、こういうものは点数に置き換えられないのではないかということが、これまでいわれてきたわけです。

そして、高校における成績、あるいはその実績もきちんと評価しなければいけない、そうしないと、高校はテストに準備するだけの工場のようなものになってしまうと考えられていたわけです。そのような形で、この多肢選択式の試験だけでは、若い人の才能を測ることができないと。そして、不公正な試験になってしまう。というのも、チューター、あるいは家庭教師を雇うことができる、経済的余裕がある家の子どもたちだけが優先されるのではないかという考え方があったわけです。

ですので、小、中、高、大に至るまで、批判的な思考をきちんと培い、問題解決能力を培うためにはどうしたらいいのかということが、再度話し合われるようになりました。今や、多くの大学が、こうした標準試験から離れるということになっています。その結果として、もっと全人格的でもっと公正な評価をしたいと考えているわけです。このようなものに、客観的なデータを付けて、全ての要素を吟味して合否判定に至るということです。

そして、多くの大学では、今やSATを要求していないところもあります。また、ACTを要求していないところもあります。リベラル・アーツでトップ100に入っている32の大学では、SAT、ACTを義務化していません。そのような大学が多く増えています。そして、150の大学が既に、トップ・ティア（一流）の大学も含めて、こうしたテストをオプションにしているところが多いです。ACT、SATをオプションにする、義務にはしないということを既に打ち出している大学は、アメリカでは800に上っております。中には、例えばボウディン大学、あるいはニューヨーク大学、テキサス大学など、高名な大学も含まれています。トップの大学が既にこうしたテストの点だけということはやっていないということです。

また、SATを選択にしている大学は、さまざまな要素を考慮するようにしています。特に、高校での実績を重視します。面接をし、これまでどんな作品を作ったかポートフォリオを持ってこさせ、創造性を見せるような、これまでの実績があったかどうかも見せていきます。こうしたアプローチが、現在、進んでいるということです。

コミュニティ・チームプレイの重要性

ここで、引用したいと思います。アメリカでも著名な大学であるボウディン大学は、既に標準テストスコアの提出を強制していないのですが、「高大接続として、もっと、コミュニティであるとか、そうした課題を考えるべきだ。多くの生徒たちは、高校から大学へ行くという長い旅路をたどっていかなければいけない。その中で、さまざまなステップを踏んで、文化やコミュニティや、あるいはケアということを学んでいかなければいけない。」としています。

例えば、ジョナサンは、1年生のときにエッセイ（レポート）を書いていたのですが、何かコミュニティに関する特別な活動をして、その特別な経験を報告書にまとめたのが、非常に高く評

働かれたと聞いています。このコミュニティを重視するというにより、それが反映された合否判定になるということが非常に重要視されてきているようです。また、チームプレーであることも重視されるようになっていきます。コミュニティに対する活動なども含めて、これは学生だけではなくて、学校や、あるいは教える側にとってもよい利点を生み出していると思います。

夏にオリエンテーションプログラムが行われるわけですが、その中でもこうしたことが重視されています。クラスが始まる前に、少なくとも1週間ほど時間を割いて、オリエンテーションを行います。そこで、既にいる生徒たちのつながりなどを持たせます。また、シモンズカレッジでは、スカベンジャーハント (scavenger hunt 本来は、借り物競走を指すが、現在では、行って調べてみないと答えを得られないようなたぐさの小さなクイズによる競争を指す。) を行います。これもオリエンテーションの1つです。

ということで、多くの大学において、特に気を配ったのが、大きな組織をより小規模なコミュニティに細分化するということです。例えば、学寮ベースのコミュニティづくりの活動とか、学内のスポーツイベント等々です。

先ほど申し上げた、家族の複雑な気持ちというところですが、われわれの息子が新しい世界へと進学したということ、これは見落とされてきた側面です。親は、子どもとの関わり方が新しくなることによって、移行期の試練を感じます。これは、従来型の背景を持った家族にとって、よくあることだと思います。自分たちは大学に行っていないような家族がそうです。自分たちの子どもたちが新しい世界へ巣立っていくのが苦しいと。

例えば、高等教育において中退する例としては、特に、家族が家事を手伝ってもらうために子どもを呼び戻すということが、女子学生によく見られます。高等教育においては、家族に子どもの様子を伝えることによって、家族ともつながりを持つ努力をしています。そうすることによって、家族をより関与させることができるのです。

一般教養に対する意識

4つ目の、孤独な学生についてのお話ですが、先ほど、大学の2年生の時期のプログラムについてお話ししました。これは、学部生の苦情の多くを占める課題の1つです。つまり、一般教養課程がつまらないという苦情です。それによって立ちを感じる、また、移行プロセスがもともと期待したものと比べてつらいものになってしまうということがございます。ここでのジレンマは、もちろん、学校としては一般教育を受けてほしいと思います、基本的な能力を付けてほしい。その一方で、より魅力的な、個人に合った教育も受けてほしいということです。

また、このストーリーに入っていた2つ目の問題は、大学の最初の2年でよくあることなのですが、大学において、大規模で一般的な講義を受けなければいけないということです。その際の教員は、若手の教員だったり、大学院の助手だったりします。4年制の大学が取っている対応としては、より専門的な講義を、経験の長い教員などが行います。そして、その講義の内容は、学生が知的な情熱を追求できるような形で教えます。

現実社会に向けた学習

それでは、5番目の点にいきたいと思います。学習者から、従業員、社員へと変わっていくわけ

ですが、面接のプロセスについて、先ほど申し上げましたが、多くの研究結果や調査内容が示しているところによりますと、雇用者の目から見ると、高等教育を卒業した後に、学生たちは就職先で必要なスキルが育っていないという点を指摘しています。勤勉な職業倫理とか、チームで働く能力、問題解決スキル、そして、リーダーシップスキルや文面によるコミュニケーションスキルなどが育っていないのです。

ということで、大学は、今やグループプロジェクトやクラス内のグループワークなどを採用しています。これは、幼、小、中等教育や高等教育でも採用が増えている、重要な取り組みです。それによって、チーム思考スキルを育成しようとしています。

また、もう1つ、高等教育が高大接続の側面に対応している方法としては、地元企業や組織との協調型プログラムを採用するということです。これによって、現実に即した学習機会を与えようとしています。インターンシップの機会を与えたり、コミュニティサービスの学習の機会を与えたりしています。

また、大学などはキャリアサービスオフィスといったものに対して投資を行って、学生たちにアドバイスをしています。また、卒業生などのリソースを使って、就職活動に役立ててもらっています。

ということで、一般的に言いますと、いかに学生たちに準備させ、評価するかという方法が改善される必要があると思います。どうやって現実の世界を学生たちに学習してもらうか。いかにして、家族とかコミュニティという意味でも、生徒のニーズに対応していくのか。基礎知識や個人的な興味といったもののバランスを取っていくのか。卒業後の生活に対して、どうやって生徒たちの準備を整えるのか。そして、どうやって対人管理のスキルなどを教えるか。また、卒業した後、新しい情報とか新しい考え方をどうやって身に付けていくのか。どうすれば自己指導的、自己演出的な役者の役割という異なるパラダイムを学んでもらえるのかという点です。

学校から社会への移行

それでは、このポリシー志向の研究に対する提案ということで、高大接続という観点から、いくつか申し上げたいと思います。移行サービスの性質、レベルなど、提供するさまざまな組織が必要となると思います。自然減、在籍率といったものがこれに関連してきます。また、実際に学生の考え方などを取り入れていく必要があります。単に学生たちのために何するかということだけではなく、彼らの意見を重視する必要があります。どのような認識を持っていて、彼らにとってどんなことが役に立つのかということに着目していく必要があります。

また、より長期的な視点に立って、その結果を見ていく必要があるでしょう。学生が将来どうなっていくのか。就職をした後の生活への移行ということも視野に入れていく必要があります。

教育の重要な特徴、特にアメリカで1つ言われているのは、過去150年間の歴史に関わってきます。つまり、インクルージョンということです。教育というのは、今でも自己改善、社会移動性、文化・教育・経済・政治・主流との統合への入り口だと思います。

アングロサクソン系の白人、つまりWASPが支配的だった過去から、今や、より多元的な平等な社会へとシフトが進んでいます。まだまだ改善点はありますが、以前、女性などは権利や機会が限定的でしたが、今や指導者になったり、社会に参画したりしています。また、さまざまな民

族などが移民してきていることなどにも言えます。最近で一番重要性の高いグループは、特別支援学級の生徒たちでして、これは私の同僚のノーラ・スティーブンからももう少し詳しく申し上げていきます。ということで、研究対象となるのは、過小評価されたグループにとってどんな移行期のサポートが有益かということです。例えば、労働者階級の方たちとか、障害を持った人たちです。

まとめ

最後になりますが、いくつかまとめを申し上げたいと思います。2人の石工職人が中世で働いていました。何をしているのかと聞くと、1人は「レンガを並べている」と語りました。もう1人は、「私は大聖堂を建てている」と言いました。この話は、応用的・実用的なフォーカスと学術的なフォーカスの違いを表すために、よく使われています。つまり、意味をベースにしたミッション思考型の捉え方との対比です。

しかし、私は、これは間違った比較だと思います。私は、両方必要だと思うのです。実用的であり、意味や幅広い文脈を捉えられるという、両方の能力が必要です。そうすることによって、既存の知識と、より積極的、建設的な知識を捉えることができると思います。

ということで、緊張感とかジレンマといったものが、解明しようとしていることの核心だと思います。教育とはどうあるべきか、ということです。既存の情報を吸収するだけなのか。より積極的に意味を理解しようとしているのか。最適な基準、評価の手順は何なのか。また、移行プロセスの理解とかサポートはどうすればよいのか。こういったことが非常に関連してくると思います。

こういった事実などから、私も元気づけられています。私たちも、学生、そして家族や教員にとってもメリットのある形で貢献していきたいと思っています。

* 以上は同時通訳された日本語を録音し文字化したのを編集して掲載している。それについては、講演者と通訳の両方から許諾を得ている。